

40 名護親方と

具志頭親方（口）

昔、名護親方という人と具志頭親方という人は、同輩同士で、中国にも留学に行った人です。この名護の親方と具志頭親方のお話でございますが。

実はこの琉球国に、昔は、中国と取引をしております。中国からある日のこと、石碑が送られて来ておりまして。この石碑がもう、年月が経て、壊れて文字も、どんな文字が書いてあったか、刻まれてあったかわからないくらい破損しておりました。そうしておるうちに、来年は中国から使者がお見えになるといふことに決まりましたので、この琉球では、

「大変だ。使者がお見えになるが、この、中国から送られてきたところの石碑を、元のようにきれいにしておかないというと、中国に対して済まないから、是非この石碑を新たにこしらえて、設置しておかなければならない」ということになりました。国王のところで、「是非これを、それじゃあ設けるように」という命令

が下りましたので、これを造る、これを設置する準備に取りかかりました。

ある日、その設置をする材料とか、その他のことはもう、きれいに片付いて、準備できておりますけれども、肝心かなめの、その石碑に刻まれておった文字が、文句が、何という文句が刻まれておったか、それをわかる人がいない。それで国王が、名護の親方と具志頭親方に、

「お前たちはその石碑に刻まれておった文句はわかるだろう。教えてくれ」と、お話があつたもんですから、具志頭親方もわからんから、

「わかりません」と。名護の親方は、知っておるけれども、

「私もわかりません」と言うて、お断りをしたわけです。

「もうこりや大変だ。学者といえども名護の親方と具志頭親方、この二人しかいないのに、この二人がわからなければ、もう他にわかる人はいないだろう。これは困ったことになった」と言うて、大騒動になりました。

「どうしたらいいか、どうしたらいいか」と言うて、日夜、これ、宮中では吟味ごとがされておつたらしいです。

そうすると、この名護の親方は、自分は知つてはおるんですけども、これを私が「こういうふううにして書いてありました」と、「こういうふううに刻まれておりました」と言うて、報告をしたならば、実は自分の先生が数年前に島流しされておつたらしいですね。これ、具志頭親方と名護の親方の先生が、数年前に何かの件で島流しされておられたらしいです。それで、名護の親方の考えですが、こういういい機会を逃したらもう先生をお救いすることは出来ない。是非先生をお救いするには、これより他に道はないから、私がこれを「わかります」と言うて報告したならば、私は地位も名誉も高くなるけれども、これはかまわない。是非先生をお迎えしようという覚悟で、私はわかりませんとご報告申し上げたらしいです。

で、具志頭親方という人は、同級生ではあるけれども、実際にわからないから、わからないということになつておるわけです。

それで、それをご報告申し上げたところが、国王は、「それではその先生を、島流しの罪を許そう。その先生を出迎えるようにしなさい」と言うて、下の者におつしやつたもんですから、臣下のめいめいは、その先生をお迎えする準備に取りかかりまして、船を仕立てて、そしてその、島に行つて、先生にお会いしたところが、

「私はただでは行かない。私が琉球に着いた時には、名護の親方は硯・筆を持つて私を出迎える。それから、具志頭親方は私の草履、私が履く草履を持つて、二人で出迎えるならば琉球に帰りましょう」という条件を付けたらしいです。それを国王に申し上げたところが、

「ああ、よろしい。そうする」ということに決まつて。その先生はとうとうその島流しの罪を終えて、そして、琉球国にお帰りになつたらしいです。

その時に、名護の親方は硯・筆を持つてお迎えをする。それから、具志頭親方は草履を持つてお迎えしたらしいです。それで、先生もよくわかつておられたらしいですね。やっぱし、名護の親方も聖人であるし、

それから先生も先生だから、これたち二人の根性はよく見通しだつたらしいですね。

そうして、無事その石碑の文字を、先生がおつしやつた通り書いて、無事その石碑も落成して、無事に中国からの派遣されて来られた方にもお見せすることができたというお話です。